

中国西南部彝（イ）族地域における
キリスト教の伝道史についての考察

徐 亦猛

比較文化

HIKAKU BUNKA
Comparative Cultural Studies
The Graduate School of Humanities,
Fukuoka Jo Gakuin University

福岡女学院大学大学院人文科学研究科紀要 第21号抜刷

2024年3月

ISSN 2759-1654

中国西南部彝（イ）族地域における キリスト教の伝道史についての考察¹

徐 亦 猛^{*1}

はじめに

中国は、悠久の歴史をもつ文明国の一つであり、約56の民族からなる多民族国家でもある。中国の長い歴史をふりかえると、少数民族問題は常に歴代王朝にとって社会の安定を図るための最重要問題であり、1949年の「中華人民共和国」成立以後も、政府が解決すべき最優先課題として位置づけられてきた。現代の中国少数民族において経済、政治の成長と共にキリスト教の広がりは非常に著しい。この現象は、中国少数民族の宗教研究においてきわめて興味深い課題である。従来、それぞれ文化、伝統が異なる中国の少数民族の宗教的基盤は伝統的な原始宗教である。しかし、中国の少数民族の間に非常に浸透しているのは、少数民族の伝統的な原始宗教や絶大的な影響力をもつ儒教、道教、仏教などといった漢民族の伝統的な民間信仰ではなく、西洋文化の根源であるキリスト教²である。キリスト教は外来の宗教として、中国少数民族の伝統的な原始宗教、道徳規範、既に形成されていたライフスタイル、及び少数民族の本来の文化と社会的構造に多大な影響と衝撃を与えたのは間違いない。

諸少数民族において、イ族は数多くのキリスト教信徒を有している。イ族は、中国の西南地域古羌³の子孫であり、古い少数民族の一つでもある。主に南東チベットから四川を通り雲南省に移住しており、現在では四川省南部、貴州省南部、雲南省の東北部、南部、西部などに居住している。貴州と雲南のイ族やミャオ族など他の少数民族は、複雑に混在しており、各民族が相互に影響を及ぼしている。一方四川省南部のイ族は大涼山山脈地域に住んでおり、山岳地帯の閉鎖的な環境のため、外部の影響を受けにくく、中央政権の支配さえも難しい状況にあった。中華人民共和国の成立時点で、イ族社会においては封建社会であり、地主による経済支配がありながら、奴隷制度も残っていた。

貴州と雲南のイ族地域に最も影響を与えたのは、中国内地会（China Inland Mission）と英国循道公会（the United Methodist Church）であり、四川の大涼山イ族社会に深い影響を与えたのは中華基督教会であった。第二次鴉片戦争以降、キリスト教は帝国主義の

*1 福岡女学院大学大学院人文科学研究科比較文化専攻

侵略勢力を背景にして内陸への拡大を図り、19世紀末から20世紀初頭にかけて四川、雲南、貴州などの西南部の少数民族地域で伝道活動を展開した。本論文は、イ族のキリスト教伝道史の考察に重点を置き、当時のイ族のキリスト教受容の状況を把握することを目指したい。

一、貴州のイ族におけるキリスト教の宣教活動

1894年、中国内地会のイギリス人宣教師アデーム (J.R.Adam、党居仁) は貴州の安順地域での伝道活動を開始したが、漢民族の多い安順という都市は漢文化の強い影響があり、キリスト教徒の増加は非常に緩やかであった。1899年以降、アデームは伝道の重点を安順周辺のミャオ族やイ族の村々に置き、同年には普定などミャオ族の村に貴州の少数民族の中で初めての教会と教育センターを設立した。その後、内地会は安順周辺の少数民族地域での影響を急速に拡大させ、アデームも現地及び周辺のミャオ族から「ミャオ族の王」と奉じられた。そのため、安順から遠く離れた雲南・貴州境界地域の多くのミャオ族も安順へ赴き、キリスト教に改宗した。内地会が安順以外に、貴州西北の少数民族が住む地域にも開拓を始め、威寧の葛布教会を設立し、他方では貴州西北の大定にも進出した。

大定の少数民族の中で、最初に内地会は東関林と安樂の2つのイ族村で教会を建てたが、その後、核桃坪、公鷄山、中警、法窩などのイ族村においてもキリスト教を信仰するようになり、これらの地域には独立した教会も設立された。アデームが等堆ミャオ族教会を設立した後、雲南のミャオ族が安順に行く道程の遠さに鑑みて、アデームは彼らが昭通に赴き、英国循道公会の宣教師ポラード牧師 (Samuel Pollard、柏格理) を訪ねるよう紹介した。1904年7月アデームの手紙を携えた4人のミャオ族が昭通にポラードを訪ねた。この4人の到来は、ミャオ族のキリスト教歴史上に新しいページを書き添えたと同時に、ポラードの宣教活動の転換点ともなった。ポラードは彼らを暖かく欲待し、彼らに教義を伝え、さらに帰ったらミャオ族同胞に昭通へ来て入信することを勧めるよう頼んだ。その後、ミャオ族は一団また一団とやってきた。彼らは穀物袋を背負い、山を越え、川を渡り、昭通の循道公会へやってきたのである。昭通の教会で、ポラードは彼らに水と煮炊きの火、寝る場所を用意し、そしてキリスト教の教義を授けた。雲南・貴州の多くのミャオ族が1904年(辰の年)にキリスト教に改宗し、彼らはこの歴史的事実を「龍年得道(辰の年に道を得る)」と称した⁴。

1905年、ポラードは貴州の威寧に石門坎教会を設立した後、数年の積極的な伝道活動により、イ族のキリスト教信徒はますます増加し、1911年にはポラードは英国循道公会本部に嘆願書を提出、新たにイ族教会を設立するように求めた。同年、本部の経済的支援

により、四方井イ族教会が設立され、教会専任の宣教師も派遣された。それは英国循道公会が貴州イ族地域での伝道活動の中心的教会となった⁵。

アデームは1904年に葛布に内地会の教会を建てた後、ミャオ族のほか、多くのイ族がキリスト教を信仰し始めた。1910年には、葛布教会のイ族信者の数がミャオ族を上回った。ミャオ族の言葉と異なるイ族信者はアデームにイ族の教会の設立を求めた。同年、内地会上海総本部はアデームの報告に基づき、オーストラリア出身の宣教師ポーデス（Gladstone Charles Fletcher Porteous 張爾昌）を派遣した。彼の流暢なイ族語の伝道により、葛布でのイ族信者を中心としたイ族教会も設立され、内地会のミャオ族とイ族のそれぞれ自民族だけの教会も設立された。初め、イ族教会は葛布地域を東、南、西、北の四つの地域に分かれ伝道活動を行ったが、1925年には管理の便宜を図るため、南部教会はさらに四つの地域に分割され、その一つの地域のもとに4から18の支部教会を管轄していた⁶。

二、雲南のイ族地区におけるキリスト教の宣教活動

石門坎教会が設立されると、英国循道公会は威寧周辺にミャオ族人の伝道師を派遣し、一部のミャオ族人伝道師は雲南北部の武定県洒普山に渡り、そこでミャオ族やイ族の民衆に宣教活動を行った。ポラードは1906年、二度武定県洒普山を訪問し、同年、ポラードは内地会宣教師であるアーサーG.ニコルズ（Arthur G. Nicholls 郭秀峰）を支援し、洒普山教会と教会学校を創設、キリスト教は雲南の北部地域に広がった。1923年、ニコルズはポーデス夫妻の協力により、洒普山で「基督教内地会滇北六族連合会」を立ち上げ、それに7つの総教会が設立された⁷。そのうちの3つはイ族総教会であり、ポーデス夫妻によって設立された最も大きい禄勛県のイ族撒老烏総教会は禄勛県下の各地に合計52の支部教会を有し、イ族のキリスト者を増やした。

ミャオ族人の伝道師はさらに南に進み、雲南東のイ族など他の一部の民族が住んでいた北南部地域に赴いた。その地域には葛泼と呼ばれるイ族の一派が存在した。葛泼は労働者階級の自由民であり、ミャオ族より少し社会的地位が上になっているが、土司や地主により支配されていた⁸。多くの葛泼人がミャオ族人伝道師の努力によりキリスト教へ改宗した。英国からの宣教師がそこで宣教活動をすることがなかったが、石門坎のミャオ族人伝道師の努力により、葛泼人は教会の活動を続けていた。

三、四川のイ族地区におけるキリスト教の宣教活動

四川のイ族は主に四川省西南部の大涼山地域に居住している。大涼山のイ族地域において、キリスト教の伝道は1900年に始まった。キリスト教信徒数の多い地域は会理や

西昌などである。1904年から1908年まで、アメリカ出身の牧師オープンショー（H. J. Openshaw夏時雨）が西昌に伝道し、大巷口に教会を建てたのち、まもなく彼は去った。その後、アメリカミッション宣教団体は別の宣教師を派遣して西昌で伝道を受け、キリスト教信徒の増加に繋がると、倉町に新しい教会「福音堂」と牧師館を建てた。その後、伝道地域は次第に河西、高草、裕隆、鍋蓋梁、沙坝などの町や塩源、塩辺などの県に広がった。1914年の第一次世界大戦勃発後、西洋の宣教師たちは次々と帰国したため、西昌の宣教活動は完全に停滞した。1940年、中華基督教会の代表が西昌に到着し、1941年には西昌中華基督教会が設立され、福音堂の伝道活動が再開された。西昌中華基督教会はイ族と連携しながら、キリスト教伝道活動を行ったが、実際にキリスト教に改宗するイ族はほとんどおらず、信者の大半は漢民族であった。

その一方、1900年にはアメリカバプテスト教派の宣教師が会理において伝道を始め、「真道堂」教会を北関で設立した。内地会は1908年に会理に伝道を開始し、1921年には摩坡教会が設立された⁹。1924年には岔河に支部教会が設立され、イ族人白雲科が教会の長老として1960年まで教会の各事務処理を担当した。1936年、内地会のイギリス人宣教師が会理の小黒箐地域に伝道し、イ族の土司である傅徳と共に小学校を運営した。1940年から1943年にかけて、内地会のオーストラリア人宣教師メトカーフ（George E. Metcalf 王懐仁）が摩坡で伝道し、1943年にはイ族の若者夫婦白正隆と鐘正芬が滇北神学院で学び、1946年には卒業して伝道師として教会の伝道活動を補佐した。記録によると、会理県のキリスト教信徒は中華民国時代には380人余りおり、うち都市部が200人、摩坡佐が180人であったが、1949年中華人民共和国成立以降は173人で、うち都市部が43人、摩坡佐が130人であった¹⁰。他にも昭覺、泸沽、越西、徳昌、冕寧など、宣教師が積極的に伝道活動した地域はあるが、改宗者がほとんど現れず、伝道効果は乏しかった。大涼山の独特で辺鄙な地理環境により、現地のイ族社会は外部社会との交流がなく、そのため独自の社会構造と文化的伝統は完全に保存され、西洋の文化や宗教の浸透を阻止したと言わざるを得ない。

四、イ族社会におけるキリスト教の影響

イ族が生活する地域は一般的には交通が不便で辺鄙な山岳地域なので、農業が非常に遅れ、かつ自然災害が頻繁に発生している場所であった。また、多くイ族民衆は教育や医療を受けられず、貧困かつ愚昧無知な生活を送っていると指摘されている。宣教師たちは、中国西南部地域の少数民族に伝道するために、村を訪れて宣教活動を展開する以外に、学校や病院・診療所を設立し、貧しいイ族の人々に対して様々な支援活動を行っており、実

際にイ族の社会、経済、文化の近代化を促進している。内地会と英国循道公会は貴州や雲南などの少数民族地域での医療と教育伝道活動により、貴州、雲南のイ族に重要な影響を与えている。近代の大凉山イ族に最も大きな影響を与えたのは、中華基督教会であり、1940年に西昌で中華基督教边疆事業部を設立し、大凉山イ族を主要な対象とした宣教活動は成功しなかったが、他の活動はある程度成果があり、近代の大凉山イ族社会に影響を与えた。

近代のキリスト教がイ族社会に与えた積極的な影響は、主に以下四点にまとめられる。

第一、深刻な苦難に直面している貧しいイ族の人々に新しい精神的な支えを提供し、ある程度までの生活改善が行われた。イ族社会は一般的に土司、黒彝、自由民（白彝、黒彝）、奴隷の四つの階級に分かれており、土司と黒彝の地主は一般的に富裕で力を持っている。この階級は多くのイ族の貧しい者（他の民族の貧しい者も含む）を支配していた。黒彝の貧しい者和其他の自由民は少量または全く土地をもたず、土司や地主の土地を借りて生活するため、重い地代を支払い、長時間の無報酬の労働を行わなければならないが、いつでも奴隷階級に転落する危険がある。完全に土司や地主の奴隷は最も悲惨な生活を送り、土司や地主によって好き勝手に打たれ、罵られ、殺害されたり、売られることがあった¹¹。これらの下位のイ族は生存のために必死で奮闘していたが、キリスト教の伝来により、絶望的な心の中に一筋の温かい希望の光を灯すことができた。宗教から生まれる希望の光は遅かれ早かれ消えるかもしれないが、一時的に貧しい人々に精神的な安らぎを提供できたのである。

新しい精神的な支えを提供するだけでなく、キリスト教側が積極的に行った様々な経済支援活動によって、イ族の現実の生活も一定程度改善された。イ族が生活する山岳地帯において、冬と春の二つの季節には頻繁に食糧不足の状況が発生するので、宣教師たちは飢饉が発生するとすぐ資金を募り、救済活動を行った。例えば1918年、1919年に貴州で大飢饉が発生した時、葛布教会のイギリス人宣教師は各イ族の村に急行し、被災者に穀物、塩、救済金などの援助を行った。その後、教会は葛布で牛を屠り、各地の被災者に肉を提供した。飢饉の発生を防ぐために、宣教師たちは災害対策を練り、災害の発生を減少させるよう努めた。西康の三一新村農場は、中華基督教会の边疆事業部により1945年に設立された。この農場は小麦の品種だけでなく、高粱、とうもろこし、米などの様々な農産物について改良実験を行い、地元の土地環境に適した農産物を選定する努力をした。優れた農産物の導入は地元の農業に着実な基盤を築き、これらの実験はイ族の地元住民から非常に歓迎された¹²。

病気と飢饉は、孤児や独居老人の原因となった。これらの問題に対応するために、教会

は各地に孤児院、老人ホームなどの救済機関を設立した。例えば、内地会の婦人会により大定において1923年に設立した孤児院は、さまざまな災害で孤児となった100人以上の子供たちを収容した。孤児院では、子供たちの病気を治療し、治癒後に教会の学校に通わせ、小学校を卒業した後に生計を立てる職業を手配したり、才能豊かで向上心のある孤児には、小学校を卒業した後も更なる学習の機会を提供したりした。孤児院は孤児だけでなく、身寄りのない障害者や老人も収容した。

キリスト教会が行っている様々な公益慈善活動の目的は、教会の影響を拡大し、キリスト教の普及と教会の強化を促進することであるが、実際にはこれらの慈善事業はイ族社会が抱える緊急の社会問題を解決し、貧しいイ族の生活一定程度改善している。

第二に、キリスト教学校の設立と教育振興により、キリスト教側はイ族教育事業を進展させ、知識人を育成した。明清時代にはイ族の土司階層は儒学の書物を読むことができたが、多くのイ族民衆は識字の機会を持っていなかった。教会の学校が設立される前に、イ族に向けた政府出資の学校はほとんど存在せず、社会の底辺にいるイ族民衆にとって、伝統文化の継承は口承の方法しかなかった。宣教師たちは中央政府が手の届かない山岳地帯で学校を設立し、小学校、中学校、さらには職業訓練学校まで多くの多種多様な学校を運営し、また一部の有望なイ族青年に対して、山岳地帯を離れて高等教育を受ける資金援助も行った。これにより、イ族社会には尊師重教の風潮が生み出され、近代の知識人が登場するようになった。

貴州と雲南イ族地区の教育事業の発展は、宣教師の導きだけでなく、イ族自体も教育の発展を望んでいた。同地域のほかの少数民族と比べてイ族全体の経済基盤は比較的強く、イ族教会においてもイ族の自主性は高いので、教会の学校設立に注力した。例えば、内地会のポーデスは撒老烏総教会をはじめ、各支部教会にも小学校を建てるに至った。一時的に小学校の在籍生徒数は500人を数えるまでになった。1944年撒老烏でイ族をはじめとする6族の連合西南神学校が設立された。この神学校は専門的に少数民族のために現地の伝道者を養成することに力を入れた。英国循道公会のポラードは貴州の昭通で宣教活動当初においてキリスト教宣教以外に、教会付属英国教育式の塾「中西学堂」を開設し、天文、地理、英語、数学を現地の一般のイ族民衆に教授した。その後、ポラードは威寧にミャオ族学校を建て、ミャオ族の伝統的な観念を破り男女共学の学校をとし、ミャオ族に文字や聖書の知識を普及させた。もともとミャオ族は固有の文字を持たず、歴史・神話・伝説・習慣や規則、日常の知識は口頭で伝えられてきたので¹³、ポラードはミャオ族に対する宣教活動を深めていくため、他の宣教師、漢民族とミャオ族の知識人と共にミャオ族の文字（ポラード式）を創り、聖書やミャオ族の口伝の歴史・神話・伝説などを文字化した。ポラー

ドはミャオ族の住民に「勉強して字を覚え、教養が身についたら、他民族からばかにされない」という理念を教え、多くのミャオ族の若者に入学するように勧めた。ポラードがミャオ族社会に展開していた学校教育によって、ミャオ族全体の非識字者の数が少なくなり、自身の文化の遅れによる他民族からの差別から抜け出した。

日中戦争終結後、中華基督教会边疆事業部西康区において、主にイ族を対象としている小高山小学、小黑箐小学、四開小学、三一小学、大石板小学、惠康小学などの学校が創立された。これらの学校は西昌、昭覺、塩源、会理などに分布している。大凉山イ族地域の教育は長らく遅れていたが、边疆事業部の教育活動が推進の中で、一般の人々も徐々に識字の重要性を認識し、識字は苦役ではなく良いことであると理解し始めた。特に教師に対しては大変な尊敬の念を抱き、教師が訪れると、家々は上賓のようにもてなした。边疆事業部西康区の教育活動には、学校教育と社会教育の両方が重視され、社会教育は民衆の読書室、民衆学校、辺境の招待所、巡回教育などがあった。社会教育を通じて、イ族は生計に関する知識を学び、健康的な習慣を身につけ、イ族と漢民族の対立を和らげ、国民意識を強化した。結局社会教育は大凉山イ族全体に多方面で影響を与えた。

第三に、病院と診療所の設立により、イ族地域の医療保健事業の発展を促進させた。数千年にわたり、西南山岳地域の人々は伝統、文化、経済的な理由から医薬品を利用することはなかった。それはイ族があらゆる病気を悪霊が仕掛けているものと考えていたため、彼らは病気を治療する一般的な方法として、宗教教職者ピモ（毕摩）に悪霊を追い払うことを選択していた。時には、ピモが悪霊を追い払えず、患者は治療を諦め、運命に従うこととして、病気によって命を奪われることが度々あった。宣教師は西南山岳地域で伝道する際、教会が建設されると同時に診療所も建設し、病気を治療することで人々の興味を引き、キリスト教に改宗させることを目指した。

例えば、1916年内地会所属のオーストラリア人宣教師ポーデス夫婦が武定県洒普山から禄勸県撒老烏のイ族地区に宣教活動を行った。ポーデス夫妻は医療と教育などの宣教活動を通して、イ族地区のキリスト教の基盤を固めるために働いた。当時、この地区に住むイ族は貧しく病人も多かったため、ポーデス夫妻は、自身の医学知識及びオーストラリアから持ってきた医療器材を活かし、病人の治療を行いながら伝道に努め、イ族の信頼を得た¹⁴。彼の病人の中には、大きな影響力をもっていたイ族の宗教指導者ピモと土司もいた。ポーデス夫妻の導きによって、ピモと土司はキリスト教へ改宗し、彼らの多くの追従者もキリスト教へ改宗し、大きな集団改宗運動の波が禄勸県のイ族地区において広がっていた。このように、ポーデス夫妻によって提供された医療活動はイ族への宣教のために大きな役割を果たした。西洋の医学や薬は、現地の潜在的改宗者に、人間のコントロールを超えた

病や自然環境によりよく対処する方法を提供すると同時に、イ族の伝統的な宗教実践がキリスト教に比べて効果的でないことを示したと考えられる。

確かに、キリスト教会が病院や診療所を設立し、病気治療を媒介として医療伝道活動を展開する目的であったが、実際教会の病院や診療所は博愛の精神に基づいて、非キリスト教信徒の患者を差別せず、貧しいイ族の民衆には無料で治療を提供し、非常に良好な伝道効果を上げたことにより、真にイ族の人々に福音をもたらした。

第四に、宣教師は、イ族の宗教観念、生活習慣、社会観念に重大な変革をもたらした。伝統的なイ族の原始宗教は主に自然崇拜と精霊信仰である。彼らにとって、山、樹木、竹、茶などといった大自然はすべて霊である。毎年各季節において、様々な祭りを通し、神々に対して敬意を表し、福を求めることは、原始宗教の中心部分となる¹⁵。

さらに、精霊信仰は昔のイ族にとって、「影」は「魂」であった。彼らは肉体以外の自分の影を、「霊」或は「魂」と連想した¹⁶。「霊」或は「魂」は人間が活着している時には肉体に附着するが、人間が死んだ後は、肉体から遊離しこの世に生存することもできる。イ族の靈魂概念は天国、地獄、輪廻転世の意識を形成する段階までには至っていない。彼らは靈魂からの庇護を願い、その祟りから免れたい時に、死者のために安靈の儀式を行い、彷徨わないように靈魂を鎮める。3-5年が経つとさらに壮麗の儀式を行って、靈魂を送り出し、祖先のところへ赴き、そこで安らかな楽しい生活を送らせる¹⁷。この「靈魂不滅」の観念は、イ族の祖先崇拜に思想的基礎を提供した。イ族にとって、肉体のままあの世にいる祖先のところには行けないが、魂のみは現実の世界からあの世に渡れる。祖先のところへ行くには、導き手が必要であり、導きがなければ、魂は祖先のところに行かず、彷徨う鬼になる。その導き手の役割を果たしたのは、ピモ（毕摩）というイ族の宗教教職者である。ピモはイ族の世襲の司祭であり、巫師である。男子に限って任ずることができ、一般に家伝と学習とを経てはじめてなることができる¹⁸。各家庭の儀式や部族を祭る集団の儀式においてピモが登場し、信者を集めていただけではなく、この世とあの世の橋渡し役でもある。ピモは太鼓を叩いて精霊（祖先）を呼び、その精霊（祖先）と人間との仲介役（宗教的な役割）を果たすほか、イ族の伝統文化の宣伝者でもある。イ族の言葉でピモは「教師」という意味をもつ。彼らは文化や知識に習熟し、イ文字で書かれた經典に精通し、また天文曆法、地理、系図、倫理、神話伝説などに関するイ族の典籍を熟知する。そのため、ピモはイ族社会における宗教活動に従事する神と人間の意思の媒介者であるだけでなく、社会における知識を主管する存在でもある。ピモはイ族の民衆の生活とそのほか多方面にわたってつながりを持ち、イ族社会において、極めて重要な存在である¹⁹。

イ族は貴州と雲南において有力な支配層であるが、漢民族と比べると、経済も文化も権

力分配も大変遅れていると言わざるを得ない。実際にイ族は文化的遅れによって、現実の環境を変革するための精神力と知識技能の支持を得られなければ、人々は伝統的な形式と自然からの支配に従属するだけである。そのため、イ族は自然に祖先から伝えられてきた原始宗教に頼るしかなかった。従って、自然崇拜、祖先崇拜と精霊信仰が中心になる原始宗教は、イ族の社会生活上の主要な文化となる²⁰。物質と文化の乏しい社会において、原始宗教の役割は死、病、飢餓、洪水などの人生問題に対応する能力を強化することである。悲劇、危機に出会った時、原始宗教はイ族の民衆に慰め、安全感、生命の意義を与え、貧困と欠乏を突破し、乏しさからもたらされた挫折感を克服しようとした。イ族にとって、原始宗教は、あらゆる幸運と不幸に適応する最も大切な手段として彼らの独自の生活の現実や乏しい経験から生まれたのである。

このように伝統的な宗教はイ族地域の経済発展と他文化の受け入れを妨げ、進歩と発展が困難になる原因の一つであった。この原因を解消するために、まず宣教師たちはイ族の神話・伝説には天地を創造した最高神や靈魂不滅が含まれているが、実際に聖書の教えと似ていることを発見し、イ族に聖書の話をも自分の民族の神話として解釈させ、キリスト教が先祖の信仰であると認識させた。そのため、イ族のキリスト教信徒にとって、キリスト教は民族の救いと希望であり、しばしば自らを旧約聖書のイスラエルの民になぞらえ、亡国、離散、放浪、漢民族の支配による民族の苦難を語る。イ族のキリスト教信徒はこの普遍宗教であるキリスト教の様々な教えの中でも、漢民族から政治と経済の抑圧された少数民族としての自らの苦難の歴史に説明や救済の可能性を与えてくれるような要素に対し、特に関心を抱き、それらを好んで取り上げる。さらに、イ族のキリスト教信徒にとって、宣教師たちは旧約聖書の中の預言者であり、神は宣教師たちを遣わし、彼らを通して、イ族の元来の姿、すなわち漢民族の支配から解放され、強いイ族が再建されると信じた。

次に、生活場所の辺鄙さや漢民族による残酷な搾取がもたらした経済基盤の脆弱性に加えて、強烈な鬼神観念に基づく自然崇拜、祖先崇拜、精霊信仰などの祭祀活動で神や祖先に献げる生贄として、豚や鶏など家畜を大量に屠殺したり、祭祀活動期間中の大量飲酒の習慣によって、イ族の経済はさらに深刻な影響を受けた。毎年の祭祀活動に莫大な財力をつぎ込み、巨額な借金を背負い、家計を破たんさせる例が後を絶たなかった。そのため、イ族の財産の蓄積は非常に遅れ、生活が一層貧困になっていた。宣教師たちはキリスト教に入信したイ族に対して、キリスト教信徒であれば神やキリストに祈るだけでよいと教え、伝統的な祭祀活動や、生贄にされた子牛や羊などの家畜の供養と大量飲酒を徹底的に禁止することによって、イ族の物質的な生活状況は改善された。

このようにして、イ族は徐々に伝統的な原始宗教から離れ、キリスト教に改宗し、最終

的には伝統的な宗教はキリスト教によって取って代わられた。キリスト教が行った様々な伝道活動は、人々の現実的な生活を改善するだけでなく、精神的にもイ族の人々に良い影響を与えた。イ族の人々に近代の科学技術文化情報を伝え、外部の近代文明に触れたことで、意思疎通するための扉が開かれ良好な現代の意識と習慣を形成することができた。それによって潜在的な変化を生み出すことに至った。

キリスト教の伝道は一定程度イ族社会に平等の概念をもたらし、イ族の根深い階級観念が緩和された。イ族社会の階級観念は非常に強く、各民族の居住地域でイ族の地位はミャオ族よりも高かった。イ族社会内では、各階級が自らの本分を守り、一切の越権行為が許されず、階級の制約が厳しかった。しかし、キリスト教の教義は「人々は皆神の民であり、みんな平等であり、兄弟姉妹である」と教えていた。これらの教義は無意識のうちに人々の心に平等の概念を生み出し、日常生活にも影響を与えた。中華人民共和国が成立する前、イ族社会での各階級の通婚が変化し、自由民と奴隷が結婚する現象も現れた。

五、伝統文化滅亡の危機

キリスト教が少数民族地域に伝来された本意は、神の福音を伝え、人々の考え方を变えることであり、伝道のために行われた様々な活動は客観的にイ族社会に肯定的な影響を与えた。しかし、文化と教育の面で、特にキリスト教の伝道によって引き起こされた否定的な影響も少なからずある。

イ族は独自の文字が存在していないため、口頭で歴史を伝承することが重要な役割を果たしてきた。さらにイ族の伝統民謡は民族大移動の歴史と文化を記録する手段であり、伝統舞踊は伝統的原始宗教の祭祀活動から進展変化してきたものである。イ族は蘆笙を吹いたり、蘆笙の伴奏で踊ったり、山歌を歌ったりすることがイ族の伝統文化の基礎を作り上げた。しかし、キリスト教の伝来は、こうした伝統的な文化の伝承に大きな衝撃を与えた。キリスト教は単にイ族社会の元来の伝統的な原始宗教に取って代わっただけではなく、キリスト教を中心とする概念やライフスタイルもイ族の日常の生活に浸透した。

確かに、キリスト教に入信したイ族にとっては、従来の風俗習慣の中の良からぬ部分が大幅に改善され、喫煙と飲酒の現象が減少し、祭祀活動の生贄が禁止され、結果として経済的負担が大きく緩和されたことは歓迎すべきことであった。しかしその一方では、民族の特色ある民謡や踊りがキリスト教の賛美歌に、民族の神話、伝説は聖書の物語に取って代わられたこと、教会内部で、イ族の民謡を歌ったり、民族舞踊を踊ったりすることを禁じたことによって、イ族の優れた伝統文化の伝承がおろそかにされ、そのため、イ族の多くの民謡が失われてしまった。現在、伝統的なイ族の民謡を収集、記録、整理することは

大変困難になり、伝統的な蘆笙のメロディーを復元することも不可能な状態になっている。

教会学校の設立目的は、キリスト教を伝え、少数民族社会を変革させることであった。伝道の目的から、西南のイ族地域で設立された教会学校は、学生にキリスト教教義を伝えることを最優先し、教育形式と教育内容の両方とも強い宗教的な要素を持っていた。一部の宣教団体にとっては、伝道の目的を超える学校教育活動は無益であった。したがって、雲南北部のイ族地域で活動する内地教会は、キリスト教信徒が小学校を卒業した後に中学校に進学することを不要と考えた。イ族の人々はこのようなキリスト教の教育により、徐々に西洋のキリスト教文化を受け入れ、民族の伝統宗教文化から離れたが、非キリスト教信徒は依然として伝統を守っていたため、キリスト教信徒と非キリスト教信徒の間に感情の対立が生じ、個々の民族同士の間で相互の認識が断裂し始め、この意味でキリスト教の教育はイ族の民族アイデンティティに一定の否定的な影響を与えたのである。

結論

以上の考察を通して、イ族社会におけるキリスト教伝道歴史的背景について、主に以下の二点を明らかにした。

第一に、イ族における自身の歴史的側面が注目される。20世紀初期において、イ族は平地の漢民族からの政治と経済の抑圧に苦しんでいた。その時内地会や英国循道公会に所属した宣教師が貴州と雲南地域のイ族の間で宣教活動を始めたことが集団改宗運動を引き起こす歴史的背景となった。イ族にとって、キリスト教は抑圧された少数民族としての自分の苦難の経験に対して説明と救済の可能性を与えると認識した。

第二に、内地会や英国循道公会の宣教師の働きの展開である。内地会や英国循道公会の宣教師は、伝道、教育、医療などの分野における様々な文明活動を通して、イ族社会の精神生活と物質生活を改善させ、少数民族の間に確固とした生活基盤を作り上げたと評価できる。

しかし、その一方でキリスト教の伝道の過程において、イ族はキリスト教を受容すると同時に、一部の貴重な伝統文化が失われてしまったことは見逃せない。これからキリスト教が如何に伝統的なイ族の文化と融合しながら、イ族文化の一部となり、少数民族に健全な宗教的役割を果たすのかが大きな課題となる。

(註)

- ¹ 本研究は2020年度科研費（研究課題番号：JP20K01233）により実施されたものである。
- ² 広義のキリスト教は、カトリック、東方正教、プロテスタントの三大派閥を含むが、ここで述べられているのはプロテスタントである。
- ³ 古羌は、チベット族、ナシ族、羌族の先祖でもあると言われる。
- ⁴ 原誠「中国・雲南省のプロテスタント・キリスト教についての一考察」『基督教研究』第67巻第1号、同志社大学神学部、2005年、82-84頁参照。
- ⁵ 張坦『窄門前的石門坎』、雲南教育出版社、1992年、71頁。
- ⁶ 東人達『滇黔川辺基督教傳播研究(1840-1949)』、中央民族大学、2003年。
- ⁷ 韓軍学『基督教与雲南少数民族』、雲南人民出版社、2000年、97頁。
- ⁸ 王樹徳著・東人達訳『在未知の中国—石門坎与花苗』、雲南民族出版社、2002年、437頁。
- ⁹ 秦和平・申晓虎『四川基督教資料輯要』、巴蜀出版社、2008年、26頁。
- ¹⁰ 同上、26頁。
- ¹¹ 柏格理著・東人達訳『在未知的中国—柏格理日記』、雲南民族出版社、2002年、725頁。
- ¹² 李士達「西康区作物育種工作報告」『边疆報告』第11号、1946年。
- ¹³ 鈴木正崇「ミャオ族の神話と現代—貴州省黔东南を中心に」『東アジアにおける宗教文化の再構築』、風響社、2010年、147-148頁。
- ¹⁴ Lachlan Strahan *Australia's China: Changing Perceptions from the 1930s to the 1990s.* p.111.
- ¹⁵ 白发兴『彝族传统禁忌文化研究』、云南大学出版社、2006年、81-82頁。
- ¹⁶ 戴佩丽、朱文旭等編『彝文文献研究』、中央民族学院出版、1993年、第301-302頁。
- ¹⁷ 覃光広等編著、伊藤清司監訳、王汝瀾訳『中国少数民族の信仰と習俗 上巻』、第一書房、1993年、338-339頁参照。
- ¹⁸ 同上、345頁。
- ¹⁹ 徐亦猛「中国の少数民族におけるキリスト教受容に関する研究—雲南省禄勳県イ族（彝族）の村落を中心に」『神学研究』第64号、関西学院大学神学部、2017年3月、153-154頁参照。
- ²⁰ 覃光広、前掲書、192頁。